



第37号
2015・6・14発行
金光教学研究

あの山の向こうから見えてくるのは…

第一部部長 大林 浩治



父の実家へ行った
ときのことである。
まだ子どもはよちよ
ち歩きだった。一緒
に散歩していたら、
前の方から見知らぬお

じさんがやってきて、突然、話しかけてきた。
「あんたの子か？ 子どもはのう、あの山の向こ
うを見るように育てるんぞ」

そのとき指さされた山は、海に沈む夕日を浴
びていた。以来、この美しい景色とともにおじ
さんの言葉を思い出している。親の自分考えだ
けで子どもを見ないように。そんな子育ての極
意ともなつて。

あの山の向こうとは、神様の世界のこと。そ
して子どもの未来のことでもあるだろう。とこ
ろが、最近、あの山の向こうが問題になつてし
まった。

「おじさん、いい言葉ありがとね。ときどきに
思い返してるんだ。でも、いま少し複雑。たしか、
あの山の向こうにあるのは伊方原発なんだよね」
あの山の向こうが、何だか申し訳ないことにな
っている。そんな気分の中で、子どもにこん
な言葉をかけたことがある。

「フクシマの廃炉は三〇から四〇年先だって。
お父さんが生きている間に目にすることはない
かもね」

そう言った途端、おじさんに失礼な気がした。
なので急いでこう付け加えた。

「でもどうであれ、先の希望を見ないとね。ど
んな景色が見えてくるか、大事だね」

ここは、原発つながりで、話を続けたい。

アベノミクスが唱える成長戦略の三本の矢に
原発輸出が入っている。その矢は日本と同じ地
震国のトルコへ放たれるそうだ。向けられたの
は福島に似た黒海沿岸のシノップという都市。
これも最近だが、大黒弘慈さんの論文で、シノッ
プがディオゲネスの生まれた土地だと知った(論
文タイトルは「貨幣の価値を変えよ」)。

ディオゲネスは、アレクサンドロス大王を前
に、少しも動じない。大きな糞の中でひなたぼつ
こしていた彼は、「わしが大王だ。何かして欲し
いことはあるか」と尋ねられ、こう返した。「わ
しがディオゲネスだ。おまえがそこに立つと日
陰になる。どいてくれ」。また、日中にランプを

ともし「何をしているのだ」と聞かれ、「人間
を探しているのだ」と答えたという。この人の
哲学は、キュニコス派とされ、シニカルの語源
となっている。

ディオゲネスが有名になったのは、造幣局長
官時代に贋金造りをしたから。そんなことが論
文で紹介されていた。贋金造りは、彼が哲学を
する理由になったそうだ。

シノップを支配した人物が、それまで使われ
ていたお金を用いて、それによく似たお金を変
造し、流通させようとした。シノップの人から
すれば、ほとんど贋金であるそのお金を信用し
ないといけない。そのときディオゲネスは、そ
れとは別に、さらにそれに似せた贋金を造って
いる。造幣局長官の仕事にはお金を造るほかに、
それが本物だと保証するためにお金に傷を付け
る仕事もある。なんと彼は、自分の造った贋金
にも傷を付け、一緒に流通させたのである。

傷は「これまでとよく似たお金は贋金ではな
い。またそれに似せたお金も贋金ではない」と
主張する。傷はそのために付けられたのだが、
そこにはさらにこんな意味がある。

お金の信用をぐらつかせることは、支配の正
統性もゆさぶる。彼は、支配者側が求める信用
を利用し、それによって信用を傷つけたのであ
る。大黒さんの見立てからは、お金の価値転倒
が人間への価値転倒につながるかわかる。

そのとき人間は、お金を通じて信用とは何かを問われるのだから。この事件が起きたのは、今より二三〇〇年前だという。そのシノップに、日本は原金を輸出し、お金を儲けようとしている。お金儲けの手段で原金を見るいまの日本に、はるか昔に起きた価値転倒はどう響くのか。

シノップで起きた話を聞きながら、同じように海に面したあの山の向こうから、景色が届けられていることに気づく。たしかに世の中は原金に依存していると思える。でも同時に、そこのあるのどと見えていないか。それこそ、原金もあるあの山の向こうが見させてくれる景色ではないか。

「おじさん。やっぱり、あの山の向こうには未来があるよ」

あの山の向こうからはいろんなものが見えてくる。もちろん戦争も。でも同時に、戦争のない未来も見えてくる。神様に通じるあの山の向こうからは、信じるにたる景色が届けられる。その景色は、未来を生きるこの実際として感受される。そのためにあの山は遠く海辺に浮かんでいる。(兵庫・出石教会)

★平成27年度の計画★

本年度は、研究生四名を加え、所長以下、総勢一八名で出発することとなりました。以下、主な取り組みを紹介いたします。

【紀要論文講読セミナー】

これまでの研究成果を全教の信奉者と共に学ぶ機会として、紀要論文講読セミナーを開催しています。今年も、紀要一〇号までの中から四本の論文を取りあげています。第一回(五月一〇日)、第二回(六月一〇日)はすでに終了しましたが、今後、第三回(七月一〇日)、第四回(九月一〇日)の開催を予定しています。

【第五四回教学研究会】

六月一九日(二〇日)に開催します。今年も、第一日に研究発表とプレゼンポジウム、第二日には「教祖」へ目を向ける意味——今、教学として考える——をテーマに、全体会(コメント・討議)を予定しています。

【第八回教学に関する交流集会】

九月一二日、霊地信徒会にも呼びかけつつ、「信心はなぜ大事? どう大事? — 教学の問いへ向けて」をテーマに、霊地で教学に関する交流集会を開催します。

【教学講演会】

布教功労者報徳祭時(一二月)に、紀要五五号の研究成果を題材にした教学講演会を開催します。

この他にも、教団付置研究所懇話会第一四回年次大会(於日蓮宗現代宗教研究所)や、諸学会への参加等を通じて、広く教内外の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図ってまいります。

また、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図り、より一層、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えております。

【平成二七年度研究題目】

〈第一部 教祖研究〉

- ・「神の頼み」における転倒的価値の創出
- 家業廃止、宮建築をめぐる —

所員 大林浩治

- ・「お知らせ事覚帳」の生成の過程
- 特に慶応末から明治初年の表記・体裁の特徴に注目して —

所員 岩崎繁之

- ・安政五年の「もらい受け」に窺う神々との交渉
- 村落祭祀における神楽の様相との関わりで —

所員 白石淳平

〈第二部 教義研究〉

- ・死者が感取される意味世界
- 「覚書」「覚帳」の「先祖」に関わる記述を中心に —

所員 高橋昌之

〈第三部 教団史研究〉

- ・戦後教団史における教務と教会の関係理解の諸相
- 「教会の自立性」が語られる文脈とその課題意識に注目して —

所員 児山真生



研究員

松岡光一



近づき難いが、頼りになる



期待・要望・意見を、「提言」のコーナーに寄稿するようにとの依頼を受け、正直、困った。研究員という御用を仰せつかっているとは言え、私は研究所で御用をしたこともなく、教学研究にも疎い人間である。的はずれなことになるだろうが、お許し頂きたい。

私は平成三年四月に学院を卒業後、約一六年間、本部教庁で御用を頂いた。本部教庁で最初に配属になったのは、布教部内に設置された布教教義研究室であった。そこでは、二年半後の教祖一〇年の記念大祭時に布教教義書を刊行する準備が進められており、その御用の一端に関わらせて頂いた。そのなかで、研究所で開かれる研究生向けの講座や、文献解題のゼミなどにも出席させてもらった。本部教庁の職員であ

りながら、そうした形で研究所に出入りさせて頂いたことは、有り難いことであつたと思うが、講座やゼミの内容を理解することは難しく、研究所独特の雰囲気は圧倒され、参加するのが苦痛で仕方なかった。そのため研究所に向かう足取りはいつも重く、私には、どうも近づき難い場所になっていった。

ただ一度だけ、自分の抱える御用のことで教えてもらいたいことがあり、教庁の御用が終わった後、個人的に先輩所員の方を尋ね、研究所に行つたことがある。その時は、他の所員の方々も残つてくださり、一緒になって遅くまで話し合つてくださった。あの時、話をしながら、日頃から問題意識をもつて、多くの資料に向き合っている人達の強さというものを感じ、何と頼りがいのある人達なんだろうと、何か大きな安心感を得たことを覚えている。

こうした経験から「近づき難いが、頼りになる」というのが、今も私の研究所イメージになっている。

紀要論文は、一般信奉者にとつては難しく読むにくく、敬遠されがちである。そのこともあって、私と同様、研究所には近づき難いと感じている人達が、全教には意外と多いのではないだろうか。これは教会現場にとつても、研究所にとつても、もつたえないことである。何も単に論文を平易な文章にすればよいというよう

なことではなく、もつと教会現場と研究所とが有機的につながり合える関係づくりができていくことを願うのである。教会現場では、信徒数の減少や高齢化が顕著となっており、教師不在、後継者不在の教会も多い。財の面でも厳しい状況が続いており、どうすれば人が助かり布教が展開するのか、この道の信心の確かさをどう現代の人々に伝えることができるのか、そしてどうすればもつと神様のご比礼を現すことができるのか、ということが常に大きな課題となっている。

教会現場が直面しているこうした課題に対して、教学研究の立場からのメッセージの発信がいま求められているのではないだろうか。もちろん特効薬的な正解がある訳ではないが、この困難な状況を乗り越える手がかりを共に求め合うことで、教会現場と研究所との関係ももつと密になり、双方に新たな活力が生まれてくるように思うのである。教学研究の基本スタンスからは、外れるのかもしれないが、教会現場と共に「布教」ということをもつと意識しての教学研究にはならないだろうか。

実に勝手な思いであるが、ここからの教団全体の発展・展開に向けて、頼りがいのある研究所に、大きな期待を寄せている。

(京都・墨染教会)

平成二十六年年度

研究報告を振り返って

第二部部长 高橋昌之

三年ぶりに新助手が加わり、計八本の研究報告と一本の業務報告が提出されました。

先輩たちが継続的な関心のもとに研究を進める中、新助手の二人は各々が向かおうとする研究への手掛かりを模索しながらの取り組みとなりました。須寄真治助手は文献解題を通じ、教育学研究者として現代社会や歴史上に起る諸事象と向き合う方を求めて。一方の北村貴子助手は高橋富枝師の生涯を辿りながら、神との関係において「人が人として」生きる意味を、それぞれ考えて報告にまとめました。日ごろ社会や教団にあつて肌で感じることを素直に言葉で表現し、教学の課題を展望しようとする意欲には、須寄助手、北村助手ともに通じるものがあり、今後が楽しみな報告だったと思います。

さて研究者によって注目点や強調の仕方に違いはありますが、上記のような今日の間状況に向けた問題意識は各報告に見ることが出来ます。ここでその視点から取り上げたいのが、大林浩治「神の頼みはじめ」における貨幣—貨幣

経済へ向けた神と人との関わりの意味——です。安政四年一〇月一三日に金光大神は金神から、実弟・繁右衛門を通じて普請費用を頼まれています。本報告ではその事実に浮かぶ意味を、貨幣論や当時の金光大神が置かれていた社会経済状況の分析を交えて論究しています。これまでの出来事は、後の慶応三年に神から「神の頼みはじめ」と告げられたことを前提に解釈されてきました。それに対して本報告では安政四年当時の出来事そのものに注目し、それが後に「神の頼みはじめ」と告げられた意味を探るという観点に斬新さがあります。金光大神が生きたのは、生活の隅々まで貨幣経済が浸潤していく時期にあたります。労働の価値や人間の存在までもが金額に換算されるという、今に繋がる時代の始まりです。このような中で繁右衛門に金神が憑依して依頼をしています。そこに筆者が読み取ったのは、神と人間とが容易に関わりがつかないほどの非情な生活現実の現れでした。考察からはそうした世にあつて金光大神が、神との関わりをもつて人間の本質的次元を見出させる道を求めるよう促される様子が示されます。その意味で本報告は、貨幣経済にどっぷりと浸かった現代社会と信心との関わりに、示唆を与えるものとなっています。また先に触れた観点の新しさは、今後「覚書」「覚帳」等、基礎資料の読みを展開させる可能性を有しています。

このように各自が時代の空気を吸いながら研究を進めています。その上で欠かせない資料との向き合い方についても、それぞれ課題の性格と深く関わりながら求められていました。研究所には金光大神に直接関係するもののみならず、教義や教団史に関する膨大な資料があり、今年もそうした資料に沈潜する中から浮かぶ内容を示した報告がいくつか見られました。

次にそうした報告のうち、児山真生「昭和四〇年代における「教団布教」創出の力学——教会の自立性」をめぐる問題意識と施策の過程に注目して——を取り上げます。今日、教務・教政では「教団布教」と「教会布教」を含めた「教団の布教」のあり方を求める議論が交わされています。その議論では一般的に「教団布教」の歴史的起点として、昭和五〇年頃(安田好三内局)が目される状況にあります。それに対して本報告は、その「教団布教」が施策化されるに至る動向に注目し、議会議事録や諸会合記録等を辿りつつ、「教団布教」が昭和四〇年代の「教会の自立性」を巡る問題意識との関わりで立ち現れた様相を明かしています。資料を追いながら議論の推移を示すことで、現在説かれている「教団の布教」の歴史的文脈を浮かばせる取り組みとなっています。

以上の大林所員と児山所員による報告が、今秋刊行予定の紀要『金光教学』第五五号の掲載

論文に推薦されています。

ここでもう一つ、意欲的に資料を用いた報告として、山田光徳助手の報告にも触れておきたいと思います。同報告では、今日の我々が営んでいる本教の祭典や葬儀式などが、どのように執行されるようになったのか、神道金光教会成立前後の様相に遡って検討しています。その中で、出社広前での祭典における試行錯誤や、本部で祭式が整備される様相などを、布教史資料や管長家資料等を用いて描いています。こうした取り組みを通じて同時期における、本教が本教として成り立ち、形作られていく歴史の実態の一端が明らかになることが期待されます。

紙数の関係からこれ以上詳しく触れることはできませんが、他にも、金光大神直筆資料についての資料論的検討や、金光大神の隠居と天照皇大神の関わり、神道金光教会期の教師一覧など、これまでの信仰理解を問いに付す興味深い報告が提出されました。ここからも所外との交流等を通して問題関心を広げつつ、資料に沈潜して教学の課題を求めたいと思わされています。

(岡山・岡山教会)

初めての研究報告提出、検討会を経験した新助手二名の感想を掲載します。

第三部 助手 須崎真治

今回初めて研究報告の検討会に参加した。その中で、検討するということの意味を少し分からせてもらったと思う。研究生レポートの検討会では、何か知識を得るためにという意識で質問をしていた気がする。しかし研究報告検討会では、何を質問したらよいのか分からないという経験をした。そして、おぼつかない質問をしては、なぜそのような質問をしたのかと、その意図を逆に問われ、答えられない自分に戸惑いもした。

自らの検討会では、自分が取り組んだ内容にこだわり過ぎて、つい自己防衛的な受け答えになつていたと後から気付いた。

先輩たちの検討会を通しては、初めは書かれている事柄の理解に苦しんでいたが、日ごとに、自分では考えもなかったことに出会い、自分の持つ価値観や概念が揺さぶられることを面白いと感じるようになった。

ここから教学研究に取り組み中で、ますます分らないもの、未知なるものと出会うことになると思う。そうした出会いによって、自らがそのままいられなくなる経験をするかもしれない。その時こそ、変わることを不安に思い、自らを守るのではなく、この度の検討会で知った“面白い”を思い出しつつ、一歩前へ踏み出す取り組みを求めるようでありたいと思う。

第二部 助手 北村貴子

初めての研究報告は、研究生時の実習報告の内容を引き継いで取り組んだ。検討会では、自分自身が一番関心を持っていた資料の読み方等について、他の先生から違った見方や意見が次々に出された。それによって分かったのは、私は関心を先走らせて問題を捉えようとしているから、視野が広がらず、自分の見方が他の人に共有されるものになつていないということである。関心を頭に置きながらも、一見それと関係がないように思われる内容を軽く扱わないことが、考察の広がりや深みにも繋がるのだと実感することとなった。

他の先生の検討会では、私は自分なりに気になるところを質問した。ところが、他の先生同士のやりとりを聞くと、自分の関心だけにどまらず、それ以上に理解や関心をお互いに広げていくような形で深い話がなされていた。その意味が分かり始めたとき、私自身もそれぞれの先生の研究内容への理解が深まって、自分の関心で読んでいただけの段階よりも、先生方の研究報告を「面白い」と感じられるようになった。先生方は言葉を丁寧扱いながら、自分の研究関心を他の人に伝えるように表現しようとしていて、これがこれからの自分の取り組みに必要なことなのだと感じる。言葉の可能性の大きさを大切にしながら、引き続き研究に向き合いたい。

研究所の思い出

《1》

研究裏話



元所員 松澤光明

私は、昭和五五年から六三年までの八年間、教
学研究所でお世話になっ
た。当時一緒だった方々

が、過去に懐かしい思い出をいくつか紹介して下さったので、私は、その場を十人近い人が共有しながらも、おそらく私一人しか覚えていないのではないか、そんなエピソードを一つ紹介したい。

それは、「明治二年三月十五日のお知らせ」解釈に取り組んでいたときのことである。お知らせの内容は、今年から先祖の祭りを毎年九月九日一日に行い、身内、親類を参らせよ、というもの。考祭の手がかりとして、この地方には、一族の始祖を祭る「先祖祭り」なるものが行われていたという先行調査報告があった。その内容を掘り起こそうとするのだが、なかなか実態に迫れない。そんな中、ある一族が先祖祭りについてテレビの取材を受けたという情報を得た。お宅を訪ね、祭礼の様子を聞こうとするも、あまり要領を得なかつたように記憶する。しかし、放映の録画ビデオは

残っているとのことで、それをお借りすることができた。すでに一手柄立てたかのような昂揚感を覚える私。早速、事務室玄関のテレビで観ることになった。第一部(教祖研究)のメンバーを中心に、事務室の先生方も何人か鑑賞に加わったと思う。どんな祭礼風景が映し出されるのだろうか。自ずと胸の鼓動が高まる。

さて、始まったのはお昼のワイドショー的な番組。さっきまでの期待が少し曇った。CMに続いて、「岡山県浅口郡金光町の里に、代々先祖祭りを仕える一族がある」。おおよそそんなナレーションだったろう。画面のテロップには「岡山県今光町」の文字。あらあら、空気がざわつく。私の胸にイヤーナ予感が膨らんだ。

やがてカメラがズームして大きく映し出したもの。それは、旧家の祭壇でもなく、ましてや祭礼の風景でもなく、座敷の天井板の節目模様だった。「あそこ、人の顔に見えませんか？」とリポーターの声。いやな予感は想定を超えた。次に映し出されたもの。それはまたしても立派な座卓の模様だった。「ここにご先祖の霊が浮かび上がってますねえ」。両シーンのインパクトがあまりに強すぎて、ほかの内容は覚えていない。ある先輩が「まあ、テレビの興味はこんなもんやろ」と慰め?の一言。この一幕が、その後あまり話題に上った記憶がないのは、皆さんの優しさゆえだろう。

(三重・関教会)

ニューフェイス

事務長 滝口祥雄(日向教会)

平成八年八月に学院へ異動になって以来、図書館を経て、再び研究所で御用させていただくことになりました。当時とは部屋の配置が変わり、お世話になった先輩諸師の多くも勇退されていて、ちよつとした浦島太郎の気分を味わっています。そうとはいえ、気持ちだけは若手の頃を忘れずに、実意を込めて、一つ一つ御用を進めさせていただく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

事務室(臨時御用奉仕) 田村清子(鏡町教会)

子育てが一段落し、昨年末より教徒社で、研究所には三月からお世話になっております。それまで建物の中に入ったことすらほとんどなく、未だに身も心も迷子になります。風に揺れる木々の緑、鳥のさえずり、学院から聞こえる楽の音。そして、滴り落ちる毛虫達。日々新しい発見と驚きの中に、御用に使用させていただく喜びを感じています。

第一部 片岡義智(向島西教会)

皆さんこんにちは。しまなみ海道の最も本州寄りにある向島からやって来ました。結婚はしていて、単身赴任で独身寮に住んでいます。入所から数日は教会から持ってきたお餅で、何とか生きていました。

この道のエキスパートであられる諸先輩方に鍛えてもらいながら、自分の中での金光教とは、と

研究所の思い出

《2》

研究所で学んだこと

元主事 太田信治



私は金光教教学研究研究所の事務のご用を三年半させて頂きました。今思えば、教主金光様のおられる御本所で、朝、金光様にお届けをして、教祖奥城を通って研究所に向かう、本当に贅沢な時間を過ごさせて頂きました。

当時、事務長でした馬場先生の下で、研究者の先生達が研究に没頭できるように、事務全般から建物の修繕、職員の生活に関わることでまで色々なことをさせて頂きました。覚えていることは、梅雨に入る前に研究所の屋根に登って行う樋掃除です。二階のベランダから脚立をのぼして屋根の上に登るのですが、脚立が短くて、ロッククライミングのように命がけで登っていました。また、屋根裏にミツバチが大きな巣を作り、夏の暑い日に蜜が溶けて、雨漏りのように天井裏を汚したときには、懐中電灯を持ってミツバチがブンブン飛び回る中、ブルーシートを敷きに行ったことなども印象に残っています。

話は変わりますが、研究所に来て最初に驚いたことは、研究者の先生達の帰る時間がとても遅いことです。研究に関することから、世間の関心事、日常生活の話題など、毎日夜中まで（お酒を飲みながら）話をされていきました。私も何度か、その輪の中に入ったことがありましたが、終わることなく続く会話に、最後まで付き合うことができなかった、いつも途中で帰ってしまいました。在籍教会でのご用をさせて頂く中で、ご信者さんと関わり、じっくりと話を聞くことの難しさを感じる時、研究所にいる間に、もっとあのお酒の席に参加していれば良かったなあと思念に思うことがあります。今になってみて思うのは、ただの世間話ではなく、信心の興味となる大切な話をされていたのだなということです。

研究所のご用を通して多くの人と出会わせて頂いたことが私の財産です。けれど、そのように気づかせて頂いたのは、退所してからです。私の送別会の席で、ある研究者の先生から「人と関わることから逃げちゃいけないよ。どんなに参拝や掃除などに取組んだとしても、人と関わること無しには成長できないよ」と言われて、目から鱗が落ちました。この言葉を教訓に、人との出会い、人と関わることを大切にしながら教会ご用に当たらせて頂いています。

（福岡・西八幡教会）

いう芯を作っていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

第二部 浅田千枝（葺合教会）

動物と食物をこよなく愛す三〇歳です。あてもなく自転車で走るのも大好きで、金光町からどこまで辿り着けるか画策しています。

現在は、信仰上興味を持つ言葉（例えば、めぐりや不浄、穢れ）に関し、関係紀要を読み、知識を深めている最中です。好みの異性は教祖様、と切り切る程の教祖様愛を原動力に、神様の御用に使われる自分になるべく、日々の研究生生活に臨みたいのです。

第三部 成田明信（御立教会）

私は妻と拳闘をこよなく愛する二四歳です。今は出社や教団等、今まで自分の中で当たり前のように思ってきたものに対し、改めて「それって何だ？」と問い、明らかにしようとして取り組んでいます。今後は楽しむ心、喜ぶ心をもって研究して、世のお役に立てるようになりたいです。

第一部 森川育子（田原本教会）

私は自分が所属する金光教について知らないことばかりです。それ故に研究所では、知りたいことや分からないことを学んでいき、自分を見つめていきたいと考えています。学院時代に最も仲の良かった睡魔と話し合いながら、御用に励みたいと思います。何事にも至らぬ若輩でありますので、ご指導よろしくお願い致します。

彙報

(平成二六年六月一日)
二七年五月三一日

▲人事関係▼

一、職員(教団職員)

- 書記毛利義幸、九月一日付で主事に任命。
- 教師須崎真治、同北村貴子、一〇月一日付で助手に任命。
- 主事佐藤幸乃、十一月一日付で図書館に異動。
- 教師田村清子、三月一日付で臨時御用奉仕に採用。
- 部長大林浩治、三月一八日で任期満了、翌三月一九日付で再任(第一部長に指名)。
- 事務長兼資料室長三好光二四月二七日付で学院に異動。
- 図書館調査員滝口祥雄、四月一七日付で事務長に任命。
- 主事中西教幸、四月一七日付で資料室長に指名。

二、研究生

- 平成二六年度
- 研究生須崎真治、同北村貴子、九月三〇日で委嘱期間満了。
- 平成二七年度
- 教徒片岡義智、同浅田千枝、同成田明信、同森川育子、五月一日付で研究生を委嘱。

三、嘱託

- 嘱託姫野教善、同山崎達彦、同前田祝一、七月二二日で委嘱期間満了。
- 嘱託早川公明、同河井信吉、同宮本要太郎、同土居浩、七月二二日で委嘱期間満了、翌七月二二日付で再度委嘱。
- 中里巧、斎藤文彦、七月二二日付で嘱託を委嘱。

四、研究員

- 研究員岩崎道與、九月一〇日で委嘱期間満了。

○教師野中正幸、九月二一日付で研究員を委嘱。

五、評議員

- 評議員岩崎道與、八月九日で任期満了、翌八月一〇日付で再任。
- 評議員安武道義、八月三二日で任期満了(三期二年)。
- 教師高橋寛志、九月一日付で評議員に任命。
- 教師阪井澄雄、二月一日付で評議員に任命。
- 評議員森田光昭、二月九日で任期満了(三期二年)。
- ※五月三一日現在
- 所長一名、部長三名、幹事一名、所員一名、助手三名、事務長一名、主事三名、臨時御用奉仕一名(計一四名)、研究生四名、嘱託七名、研究員六名、評議員五名



研究生入所式後、客殿前庭にて
前列左より森川、成田、所長、片岡、浅田

SAKAMICHI

今号も無事発行することができました。執筆のお願いを快くご承引頂き、寄稿して下さい下さった皆様に御礼を申し上げます。

さて、昭和五年に竣工し、現在は教学研究所で使用させて頂いている客殿は、純然たる和風建築の外観にもかかわらず、屋根裏にトラス構造の小屋組を採用した、西洋建築風の造作になっています。

これは、橋梁設計のノウハウを生かした、江川三郎八に始まる「江川式小屋組」の意匠によるものとされています。江川三郎八は、万延元年、福島県に生まれ、宮大工を経て、福島県職員、岡山県技手を歴任した後、昭和三年から金光教の嘱託技師として、教団施設の造営に当たりました。岡山県内には、西洋風建築の特徴を持つ国重要文化財の旧遷喬尋常小学校校舎(真庭市)や登録有形文化財の閑谷学校資料館(備前市)など、江川が設計した施設が数多く残されています。

近年の建築史研究により、今まで余り知られることのなかった建築家江川三郎八の存在がクローズアップされ、その功績が現代に甦りました。分野は違えども、歴史に埋もれがちな事象に光を当てることは、研究者の大切な使命であると思わされます。

発行・印刷 金光教教学研究 所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五) 四二一三一七

FAX (〇八六五) 四二一三一九